

幸野椋嶺に学んだ日本画家たち コレクション展 ❸

～竹内栖鳳・川合玉堂・上村松園たち～

幕末から明治という時代の変革期を生き、京都画壇の開拓者と称された幸野椋嶺(1844～1895)。椋嶺は、円山派の中島来章、次いで四条派の塩川文麟に学び、明治9年の第5回京都博覧会では褒状を受章するなど、早くより高い評価を受けています。

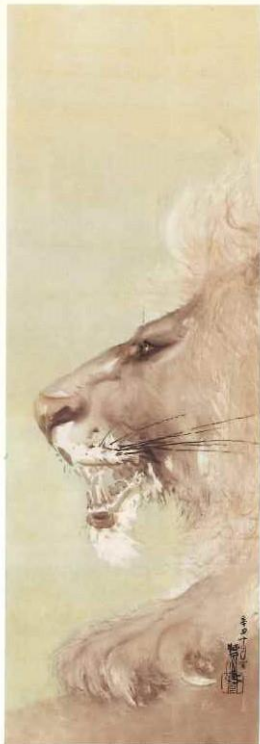
また、教育者としても名高く、京都府画学校や画塾・幸野私塾などの場で後進の教育に尽くし、後に椋嶺門下の四天王と言われた菊池芳文、谷口香嶠、竹内栖鳳、都路華香や川合玉堂、上村松園などに自身が継承・開拓した画風を伝え、彼らの表現の土台を築いた点においても、京都画壇史上欠くことの出来ない存在といえます。

本展では、幸野椋嶺と二人の師匠や後の近代日本画の展開に重要な働きをした椋嶺門下の高弟たち、さらにはその教えを受け継ぎ、現代日本画に継承していった日本画家たちの作品を4つの章に分けてご紹介します。

なお、特集展示では、刻を描いた横山大観の作品を紹介します。



幸野椋嶺《梅二葩》明治20年代



左より：上村松園《雪中美人図》昭和21年、竹内栖鳳《獅子図》明治34年、新収蔵品 幸野椋嶺《朝暉蓮花舟図》明治14年頃、新収蔵品 谷口香嶠《神武天皇 廻望国状図》大正4年頃

二階堂美術館へのアクセス

- ◆ JR日豊本線「日出駅」下車 徒歩3分
- ◆ 大分交通バス「堀」停留所下車 徒歩15分

《特集展示》

横山大観が

描いた刻

とき

横山大観《山村暮色》昭和4年頃

横山大観《鶴》明治38年